

六月十日が時の記念日なのでこゝに時計が出て来たのであるけれど時の記念日のことは年少組では話さないでもよいかと思ふ、針のうごくやうにした時計といふより文字板に針をつけたのをお室に置いて針をうごかして今何時といつて實際の時計と合せてみせたり、幼稚園が始まる時刻、おべんどうの時刻、お八つ、お歸りの時刻を示してみせたりする。この作つた時計はおまゝこの家の時計に自由に使はせるやうにする。

野菜

子ども達と植えた野菜が何に依らず收穫したらそれは本當にうれしい事で、さつそくお盆にのせて家庭でなりお初物として神棚、佛壇に供へるといふ所であるが、寫生をしたり茄子や胡瓜のやうなものなり粘土でつくる。二十日大根や人蔘などならきれいな紙、切紙が楽しめる。そのままやえんどうは子ども達にわけてもよいであらう。若し幼稚園で出来たお野菜がない時は時々季節々々のものを用意して手技の材料にして親しませるやうにし度い。

談話

安村 ぶさ

六月といへば幼稚園生活にも幾分慣れた頃で、團體行動にも素直に入つて行ける心構へが、淡いながらも出来かけた時であります。それと同時に、各自の持ち前を發揮して、他人の迷惑になる

様な元氣過ぎる子ども二人三人現れ始めます。そんな時に子ども達の氣持を和げる爲に、靜かにお話を聴かせるといふのは誠に好ましい事であります。又此の頃はうつつたうしい梅雨の時期ですが、平常日光を惜しんで戸外で遊ぶ幼稚園では、却つて此の雨を幸ひとして靜かにお話をしたいものであります。

此の月、保育案に豫定されて居ますのは、西瓜と鼠、田原藤太、梅雨の話、牛若丸、馬の頭、赤の王様、七匹の小山羊、三匹の子犬のはなしであります。此の一ヶ月には古今、東西のお話が選ばれてあり、變化があつて大變面白のですが、勿論此の他に適當なものとはどんなとんぼ抜つて、こどもの心を豊かならしめ、潤ひあらしめたいと存じます。先づ保育案に従つて大體みて参ります。

「西瓜と鼠」八百屋のお店に竝んであるお野菜が、毎晩鼠に悪戯をされるので困つてゐました。そこでお野菜達はいろ／＼相談した結果、西瓜に懲らしめてもらふ様頼みます。西瓜は其の晩鼠の虚をつき、その大きな重い體を利用してうまく懲らしたといふお話であります。結局、悪い事をした爲に懲らしめられたといふのでせうが、それよりも、此の、場面を八百屋に、登場人物をお野菜に、といふ點に注意したいと思ひます。其の爲に單純ではあります、極めてユーモラスに、然も自然に筋の運ぶ點がこども達に迎へられるのだと思ひます。尤も、西瓜がごろ／＼と轉つて、鼠のしつぽをきゆつとふんまへるといふ所は、それはもうたまらなく愉快らしく、歡聲を擧げるのですけれど、話中に出て来る野菜は、胡瓜、茄子、トマト、すいき、ちやがいも、さつま

いも、里芋、キャベツ、蓮、ごぼうで今の時代からみると、夢の様に豊富な野菜です。その色とりどりの美しさ、豊かさは私達人人だけの魅力でせうか、とにかく野菜に對する生新な感じを十分こめて、いき／＼と而も自然に話したいものであります。こども達も各々頭の中で豊かに野菜の人物を活躍させる事でせう。

「田原藤太」 此は梗概を書くまでもないお話、此のお話の山は、どうしても退治出来なかつた百足を、つばきで濡らした矢で射止めた、といふ所であります。此處までお話は息つく間もない程ぐんぐん進展してまゐり、こゝでぐつと抑へられます。こども達も息づまる様な緊張を以て聴き、こゝでホツと安心する様です。藤太と龍王の會話は、藤太は落着いて強そうに、龍王はおびえてゐる者の様に感じなこめ、淀みなく進みたいと思ひます。こどもは話し手から受取るものを頭の中で次々に組立て、ゆくものですが、會話の時に、つゝかへたり、いひ直したりしては、せつかくの樂しさを阻む事になります。

「牛若丸」 小さくても、實力、膽力のある者は、たゞむちやに強い者に勝つといふ點に興味のあるお話であります。

「梅雨の話」とありますが、特別にさういふ童話があるわけではなく、季節の話題としてあげてゐるのです。梅雨の事は、國民學校よみかた三の巻に出てゐるので、此を参考にしたらいかと思ひますが、幼稚園では梅雨の時期に簡単な晴雨の表を毎日つけておき、平常より雨が多く、しど／＼と續いて降る事を示します。そして、その雨の爲に、大事なお米の植ゑつけが出来る事を教へ、

又此が濟めばからりとした夏の來る事を知らせて、夏の楽しみを待ち望ませる位でよいかと思ひます。

「馬の頭」 此はおぢいさん、おばあさんと住んでゐる冬子といふ働き者と、秋子といふなまけ者が、おばあさんのいひついで木の實を探りに行きます。秋子は冬子の實の澤山入つた籠を横取りして自分が採つたもの、様に装ふのです。すると、おばあさんはもど／＼嫌ひな冬子を捨て、了ふといひはります。おぢいさんは仕方なく、馬車に冬子を乗せて森の中に捨て、しまふのです。すると、馬が頭でとん／＼と扉を叩き、冬子に開けさせ、いろ／＼用事をいひつけます。冬子は快く聞いてやります。最後に馬は、右の耳から左の耳に冬子をくゞらせて綺麗な子にしてやるのです。それを見たおばあさんは羨しがつて、秋子も同様にさせますが、秋子は馬のいふ事を聞かぬ爲に遂々汚くなつてしまふといふお話です。原文に就いてよく讀んで頂けば分りますが、馬との對話が冬子と秋子との場合對照的になつてゐて面白く、殊に馬の耳をくゞるとか、全體の構想が一寸奇抜で興味があります。此は全く、いゝ事をした時にはいゝ報ひがあり、悪い事をすれば悪い報ひがあるといふのを諷したお話ですが、全體の運び方が思ひつきの爲、それ程露骨でありませぬ。話す場合には決して、だから悪い事をするものではありません等といはぬ事です。こどもはこどもなりに理解出来るのですから。

「七匹の子山羊」 グリムの代表的な童話です。グリム童話の價値の一つには、ゲルマン風の自主獨立、剛健敢爲の精神が含まれ

て居り、教育的利用性に富む、といふ事が擧げられて居ります、此の物語も、明らかに此にあてはまるものです。母山羊が子山羊をどういふ風にして、狼から救つたか、その心の碎き方、やり方、全く剛健敢爲であります。始めて聞くこどもは、母山羊が狼の事を豫め教へて置く爲に狼の出現を心待ちにし、狼が母山羊を装つて来る所に軽い快い恐れと興味を起し、遂ひに食へてしまふ所で絶頂に達します。扱、母山羊が歸つて来たのでどうなるでせうかと、こどもは大いに期待します。すると母山羊は敏で狼のお腹を切つて子山羊を救ふので、こども達はやれ／＼と安堵し、更に狼が石を詰められた爲水中に墜ちて死ぬ所で又氣持が高まります。此のお話は談話だけでなく、發展させて、人形芝居に見せたり、又子ども達で演習させてもよろしいと思ひます。こどもは他のせりふは忘れたり、ぬかしたりしても、以上に擧げた點は必ず觸れてゐます。そして、こどもながらも狼の地聲は若々しくしたり、母山羊を装ふ所はやさしくしたり、仲々技巧を凝らします。私達もそんなつもりで、餘り恐れを抱かせぬ様注意しつゝ、進めたいと思ひます。

「三匹の子犬の話」時計を知らぬ三匹の兄弟犬のお話です。三匹共時計がたゞチクタク／＼としかいはぬのでもどかしがり、ポーン／＼と時を打つので驚くのです。それを聞いた母犬がそれは時計といふもので便利なものだからといつて、三つはおやつの時間とか、五つはお夕飯などと教へます。そこで三匹は始めて安心するといふお話ですが、此は時間、時計についてこどもに興味を抱

かせるよいお話かと思ひます。チクタク／＼のくりかへしはこどもにとつては愉快な事であり、教育的母犬の説明もわざとらしくなく自然であります。此は六月の末の方に話す事に保育案ではなつてゐますが、時の記念日のあたりに話しても適しいと思ひます。以上のお話は全部、日本幼稚園協會發行の談話集に出てゐるので、原文に就いて是非一度讀んで頂き、その面白さを味ひ、こども心に徹する一助にして頂きたいと思ひます。尙お話を聴く態度は大體出来て来たのですが、いたづら等せず、靜かに聴く習慣をつけたいと思ひます。それには、話し手は、その背景がこども達の氣を散らさぬ様な場所を選んで、掛けるなり、坐るなり致します。そして凡てのこどもをよう／＼見える様にいたします。話し手は豫め十分にお話の筋、性格等を呑込んでおき、極くゆつたりした氣持で子供に話し、大げさな身振り、聲色はよした方がよいと思ひます。こどもは元氣に遊ぶと共に靜かにお話を聴くのが好きです。あの話し手の心にくひ入る様な熱心な可愛い、目、口もと。あのこども達の爲には私達はお話の眞意に深く徹しなければならぬと思ひます。そこに自らよりよい話し方が出来て来る事でせう、

手 技

及 川 ふ み

欽仕事

果 物 (いちじく)

時節柄果物の材料を限定しても容易に手に入らなかつたり、又